

謹上五十位君源藏人殿

侍所

〔海人藻芥〕葉上僧正入唐之時、重而茶ノ種ヲ被渡、梅尾明惠上人翫之、サレバ本ノ茶ト云ハ梅尾也、非ト云ハ宇治等ノ事也、

〔狂言記二〕茶つば

わが物ゆへにほねをおるく、心のうちぞおかしき、さ候へばかうこそ、さ候へばこそ、さてもわれがまうとの、中國一の法師にて、ひの茶をたてぬ事なし、いやいちぞくの寄合に、ほんの茶をたてんとて、五十くわんの、くりをもち、おほくのあしをつかふて、ひやうごのつにも著たり、兵庫たつて二日に、とがのおにも著しかば、みねの坊、谷の坊、ことにめいゑんまけるは、あかいの坊のほうさきを十斤ばかりかいとり、此つばにうち入、うしろにせおふて、國をさいて下れば、略

〔昆陽漫録六〕本非茶

太平記に曰く、佐々木道譽、我宿所に七所を粧りて、七番茶を調へ、七百種の課物を積み、七十服の本非の茶を可呑中略明惠上人茶を梅の尾へ植ふしより、梅の尾の茶名、これにて本の茶は式多く、非の茶は式少なくして、今の濃茶薄茶と云ふが如きことまゐるべし、辻某の家の貞和の頃の殘本の中に、祇園社家記の殘冊あり、その文左の如し、

祇園社家記に、茶何種と云ふこと有之、或云、十二種、或有四十種、數ヶ所有之、

巡立本非茶次第

- 一番 五日 良
- 二番 九日 仲
- 三番 七日 仙
- 四番 七日 美
- 五番 六日 親尊
- 六番 九日 岐
- 七番 十日 秋
- 八番 十日 中
- 九番 十一日 妙
- 十番 十一日 中
- 十一番 十二日 目
- 十二番 十三日 菊